

45) 乙字湯によると思われる，急性肝炎様所見を呈した肝障害の1例

中谷 敦子・片桐 次郎
 穀野真一郎・大坪 隆男
 田代 和徳・早川 晃史
 笹川 哲哉・七條 公利 (立川総合病院内科)
 市田 隆文 (新潟大学第三内科)

44才女性. 1993年3月より内痔核のため乙字湯を内服. 6月上旬より心窩部痛, 尿の濃染が出現し, 6月12日当科受診, 顕性黄疸を認め入院. 37.5度の発熱, 皮膚, 眼球結膜に黄染あり. GPT 1,694, T-Bi 14.8, 炎症所見はなくウイルス関連抗原抗体, 自己抗体ともに陰性で, 乙字湯の中止と安静, 肝庇護療法でトランスアミナーゼは改善した. 退院後患者が乙字湯の内服を再開したところ, GPT 537 と肝障害の再発現を認めた. 肝生

検組織像では急性肝炎回復期として矛盾しない所見であった. 乙字湯の LST は陰性であったが臨床経過より薬剤性肝障害が強く示唆され, 現在, 肝障害は再発なく経過観察中である.

II. 特別講演

「肝細胞増殖因子 (HGF) による肝再生機構と臨床応用への可能性」

大阪大学医学部

バイオメディカル教育研究センター

腫瘍医学部門腫瘍生化学研究部

中村 敏一 先生